

体育授業の質的研究法の開発

Development of a qualitative method of improving physical education classes

プロジェクト代表者：鈴木直樹(教育学部・講師)
SUZUKI Naoki (The Faculty of Education/ Lecturer)

1 研究の目的

単に、運動に関わる「技術」や「知識」を学習内容とし、その定着を目指すのではなく、「ひと・もの・こと」との関係の中で学習の意味や構造が変化していくことを学習ととらえる「関係論」に立脚した体育の授業の実践が多く展開されるようになった。この学習観の転換は、授業研究法の転換をも必要としている。

これまで多くの授業研究では、学習課題への子どもの適切な従事を測定するために標準化された過程変数として「ALT-PE(Academic Learning Time in Physical Education)」を利用した「ALT-PE 観察法」やあらかじめ意味のある場面や意味のある教師行動を既定し、観察評価する授業の「組織的な観察法」が活用されていた。しかし、このような研究方法では、数値情報として客観化されたもののみがデータとして取り上げられ、授業の状況や文脈は捨象される傾向にあった。ところが、「関係論的学習」では、授業における学習活動は、誰にとってもいつでも価値あるものとして実体的にその内容を取り出すことができるわけではなく、状況と文脈に応じて価値が変わる学習というかわりの中で子ども達自身が運動の意味を生成していくことが重要である。つまり、授業に流れている「かかわり合い」の様相を分析し、評価することなしには授業改善は行うことはできない。もちろん、これまでも質的な研究の方法論の提示はなされてきた。同時に、量的研究のみならず、質的研究の重要性は示唆されている。しかしながら、質的な研究は授業を実践し、改善していく営みの中では莫大な時間を要し、日々の実践では利用できないものが多かった。そこで、本研究では、これまでの先行研究の知見を援用し、学校体育で手軽に活用できる質的研究法を開発することが目的である。なお、本研究では、授業における学習や指導の営みを評価・分析し、よりよい体育授業を目指す行為を体育授業研究と定義することとする。

2 研究の方法

近年、「指導と評価の一体化」が強く叫ばれている。これは、端的に言えば、学習を評価して指導に生かすということであろう。つまり、学習評価という営みは教師における最も身近な授業研究法である。そこで、まず、質的に授業研究を行うという視点から学習評価について検討を試みる。次に、質的に授業を研究していく視点を得るために、社会的相互作用によって成立している研究対象を明らかにすることに適しているといわれる「M-GTA法(Modified-Grounded Theory Approach)」を活用して授業における子どもの学びを解釈することを試みた。さらに、これらから得られた手がかりをもとに体育授業を質的に観察し、その方法論を実践しながら、改善し、体育授業における質的な授業研究法を提案することとした。

3 研究の結果と考察

【目標にとらわれない評価】

本研究では、「目標にとらわれない評価」を次のように再定義した。

目標にとらわれない評価とは、授業や単元の目標をあらかじめ到達目標として設定することのない評価である。また、教師と子どものあいだで多面的な視点からテーマ探求プロセスにおいて「思い」や「願い」を交流することによって、学習を生成させていくような機能を果たす評価である。

この「目標にとらわれない評価」は、関係論的な学習であり、主題探求型のテーマ学習において必

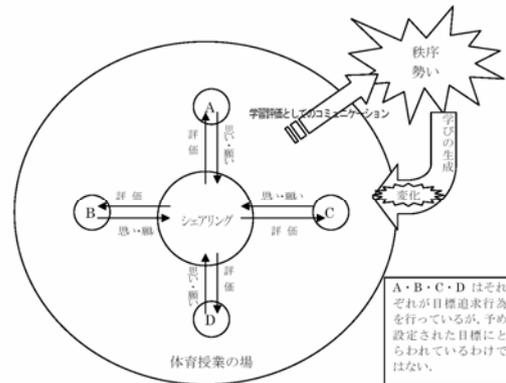


図1 体育授業における「目標にとらわれない評価」

要不可欠な評価であることが明らかとなった。そこで、テーマ学習を導入したワークショップ形式の授業実践を検討した結果、評価プロセスについて以下のように明らかになった。まず、第一段階では、Aにとって第三者となるBは、Aの「思い」や「願い」の表出や学習の現象をとらえることから、テーマ探求過程において「目標」とらわれることなく、Aの学習を評価する。そして、自分自身のテーマ探求における「目標」生成に、その評価をフィードバックしていく。第二段階として、Aは、自分自身のテーマ探求だけでなく、Bを評価することを通してBのテーマ探求を解釈することによって、多元的な視点から自分自身の目標に変化を加えていく。これは、二者間のみで行われるのではなく、C、Dという多くの他者との間で起こり、意味連関が広がっていく。そこで、第三段階として、この学習に参加する成員間において「第三者の審級」が生まれ、三項関係を基盤とした「目標にとらわれない評価」が実践される。したがって、シェアリングが重要であり、教師は、この場にある一人であり、この場を解釈しながら、授業改善を行うことが求められる。

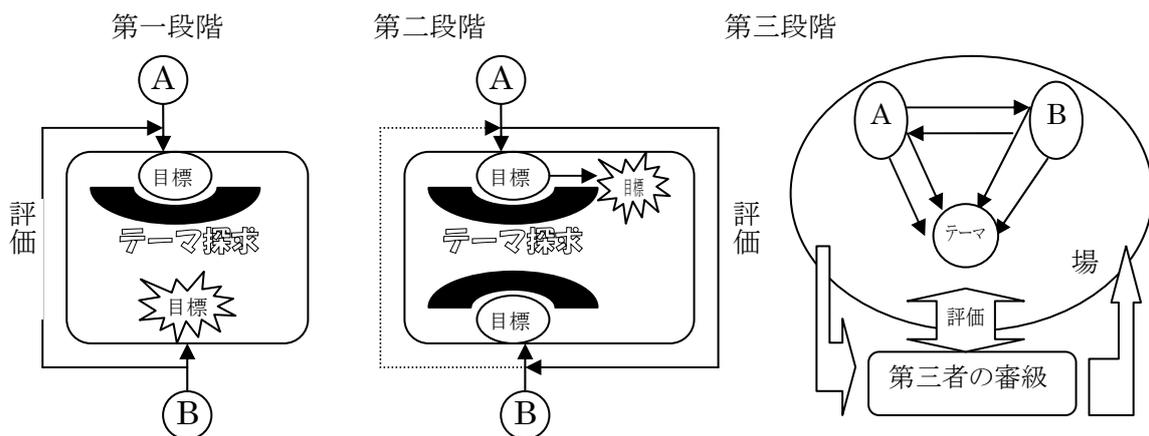


図2 ワークショップ形式の授業における評価の構造

<研究成果>

論文

- (1) 鈴木直樹(2004) 体育における「目標にとらわれない評価」の実践可能性. 学校教育学研究論集. 第10巻.
- (2) 鈴木直樹(2004) 体育における「目標にとらわれない評価」の実践化に関する検討. 新潟県体育学研究. 第22巻.
- (3) 鈴木直樹(2005) 体育における「指導と評価の一体化」に関する再検討～実践事例の考察を通して～. 埼玉大学研究紀要教育学部(教育科学). 第54第1号.
- (4) 鈴木直樹. 関係論的な学習における運動の意味に関する検討. 体育・スポーツ哲学研究. 投稿中

口頭発表

- (5) 鈴木直樹(2004) 体育における運動の意味生成に関する一考察. 日本体育スポーツ哲学会第26回大会(電気通信大学). 2004.8
- (6) 鈴木直樹(2004) 「目標にとらわれない評価」を生かした体育授業づくりに関する実践的研究. 日本スポーツ教育学会第24回大会(北海道教育大学釧路校). 2004.9

【M-GTA法の活用】

対象: A小学校 男子13名, 女子6名 計19名

調査期間: 平成16年10月～平成17年3月

データ収集: インタビューと参与観察

まず、児童が登校した直後に半構造化面接を行った。時間は一人およそ10分であった。面接時には、児童がリラックスして自由に話ができるような質問を心がけた。次に、面接をした児童を中心に参与観察を行った。さらに、授業後、授業前に面接した児童に再度半構造化面接を行った。なお、データは児童及び保護者の了解を得て、すべて記録に留めた。

分析のテーマ: 「体育授業における諸要素との関係における運動の意味生成プロセス」

焦点化するもの: ・授業における諸要素間の関係性の変容における相互作用プロセス

・生成された「運動の意味」のきっかけと運動行為の相互作用プロセス

M-GTAは、収集されたデータに基づいて、「分析テーマ」と「焦点化するもの」とからそれを解釈して、概念を生成し、複数生まれた概念間の関係から研究の目的に迫る。この分析の結果、「①運動することを

通して『感じる』経験によって運動の意味が生成される。②授業における教師や仲間、モノが独立した存在になってしまうと運動の意味生成が阻害される。③運動の意味を解釈しようとする行為そのものが、行為する自分の成長を支えている。」という結論を得た。すなわち、教師は、子どもが欲している運動の楽しさ、授業における仲間集団と教材を含めた環境との関係性の状況と文脈を読み取り、子どもが運動の意味解釈を行う場面を授業の中で生かすことができているかを評価、分析することによって授業改善につなげることができると考えられる。

<研究成果>

- 論文
 (7) 鈴木直樹. 体育授業における「学習評価としてのコミュニケーション」の機能に関する研究. ～小学校体育授業の質的な授業研究を通して～. 埼玉大学研究紀要教育学部(教育科学). 第55第1号. 投稿中
- 口頭発表
 (8) “Study about the process that students generate meanings of physical behaviours” Invitation to the 6th German-Japanese Symposium of Sport Scientists (Institut für Sportwissenschaft, Friedrich-Schiller-Universität Jena, Seidelstraße 20, 07749 Jena, Germany).
- 研究助成
 (10) 「体育における運動の意味生成過程に関する研究～関係論的な学習観に着目して～」により、埼玉大学平成17年度「総合研究機構研究プロジェクト」(若手研究)助成を受ける。

【カード構造化法】

B小学校において、授業実践を行い、その授業を分析する際に、カード構造化法を用いた。カード構造化法は、最低2名の授業分析者が、授業中に気づいたことをポストイットに書きとめ、授業後にそれらを分類し、概念を生成し、それらの概念ごとの結びつきを検討し、次の授業展開に生かしていった。授業は全5時間行ったが、この授業から得られた概念図を元に、簡易版の授業法を考案した。それをC小学校において実際に試した。試行の結果、難しいと考えられる点について、改めて修正を加え、再度、C小学校で実施し、成果と課題を明らかにした。

B小学校におけるカード構造化法による授業分析により、授業改善の指針を見出し毎回授業改善を行った結果、量的な授業研究法である子どもの形成的授業評価の「成果」、「意欲・関心」、「学び方」、「協力」といったどの項目も授業が進むごとに高まっていった。しかし、本授業分析は、授業を解釈するトレーニングが必要であり、時間もかかる。さらに、授業者本人が行うこともできない。そこで、本授業を通して実践した5時間の授業分析から、授業改善の手がかりとなる項目を抽出し、評価法を提案することとした。

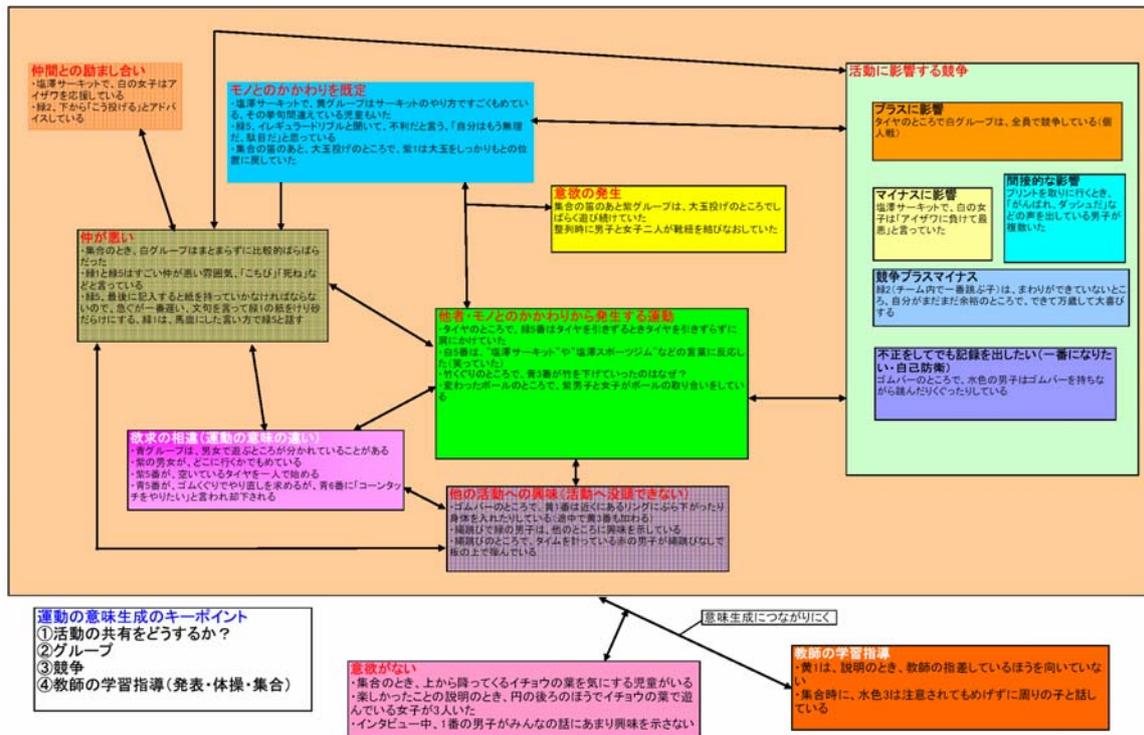


図3 カード構造化による授業分析のまとめ(1回目)

表1 改訂版・授業研究法の手順

1)	授業時にビデオ撮影を行う。
2)	授業後にビデオを見ながら、気づいたことをポストイットに自由に記述する。運動行為の事実を感じたままに記述をしていく。記述の際は、一つの出来事は一つのポストイットに記述する。二つの出来事一つには書かないようにする。この時点でできるだけたくさん記述をする。複数で行っても構わない。その場合、相談せずに行う。第三者がいる場合には、授業を参観しながら、記述していくことも好ましい。
3)	ポストイットの記述をワークシートの「教師とのかかわりから現象する学び」「仲間とのかかわりから現象する学び」「モノとのかかわりから現象する学び」「モノとのかかわりから現象する学び」「自己自身とのかかわりから現象する学び」「学びの様相(3箇所)」に分類する(ワークシートを拡大コピーして行うとやりやすい)。この時点でどれにも分類されないものは別としておく。分類されたカテゴリーをさらにわけることができれば、分類し、それぞれに概念名をつけ、関係性がわかるようにしておく(分類カテゴリー内に分類してわけ、それぞれの関係性がわかるように線で結び、その関係に見出しをつける)。残りのポストイットの記述を分類し、最初に分類したカテゴリーと結びつける。どうしても関連できない場合は、独立して分類する。
4)	各カテゴリー内で分類された学びの様相が、かかわりが子どもの学びにとってプラスに働いているものとマイナスに働いているものと解釈し、分ける。それぞれがどのような働きかけられているかを解釈し、関係性がわかるようにしておく。
5)	それぞれの関係に着目し、関係性を見出し、記述する。
6)	それらの関係性を概観し、このワークシートから解釈される子どもの学びについて記述する。
7)	以上から授業における問題点を整理し、記述し、それらを改善していく方向性を明らかにする。
*	ポストイットの記述は、70以上書くことを目安にする。
*	子どもの学びの解釈は全体像を眺める中で行うようにする。

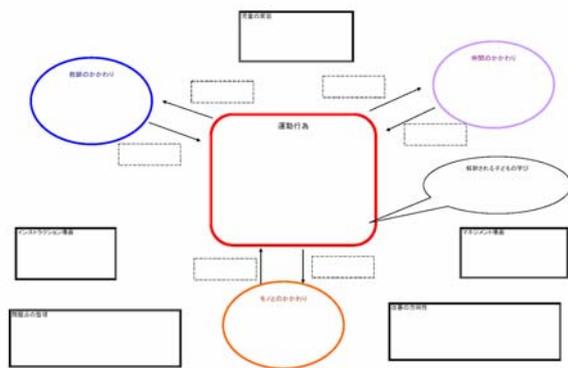
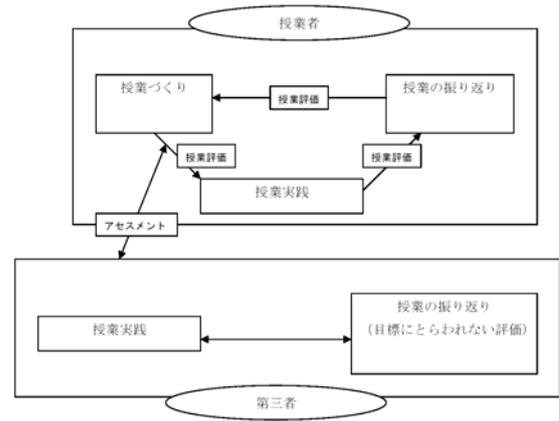


図5 授業評価法(改訂前)

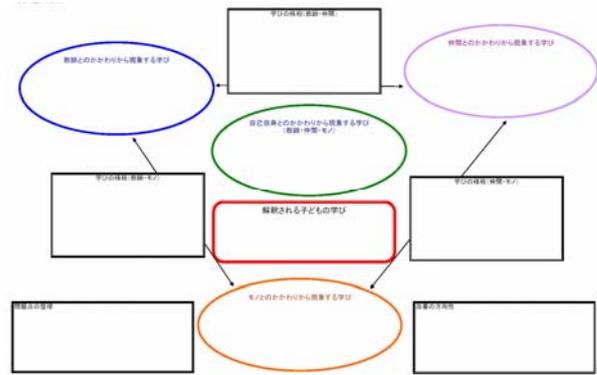


図6 授業評価表(改訂後)

「目標にとらわれない評価」と「M-GTA」による研究の成果を生かし、図5のような評価ワークシートを作成した。ここでは、データに基づいて、教師がデータ間の関係性を解釈し、書き加えるようにした。しかしながら、このシートづくりを教師が行うには、授業を振り返る視点が漠然としすぎるために、ポストイットに記述することが難しい上に、解釈に膨大な時間がかかることがわかった。そこで、記述する上で、分類の基準を予め知らせ、見出しつきのカテゴリーを増やすことで、解釈の時間を削減することとした。そして、全体を概観する中から状況と文脈を把握し、授業改善の手立てを見出すことができるように考案したものが図6である。

実践の結果、実践した教師の感想や授業の様子の変化から授業改善に役立てることができるであろうことがわかった。しかしながら、まだまだ手軽な評価法とはいえない。また、信頼性と妥当性の面からも問題があるといえよう。そこで、今後、精緻に検証していく必要があるといえる。

<研究成果>

論文

(11) 鈴木直樹. ワークショップ形式を導入した「体力を高める運動」の実践. 体育科教育学研究. 投稿中

研究助成

(12) 2005年度-2007年度「体育授業の質的研究法の開発」が科学研究費補助金, 若手研究(B)に採択される。

4 今後の課題

本研究では、質的な授業研究法の一方法論を提案できた。今後は、より手軽な、より有用な質的な研究法を考案していくために、実証研究を行っていく。また、この研究を受け、科学研究費の助成を受けることができたので、アメリカ、イギリス、ドイツの体育授業研究の動向を探りつつ、本研究を発展させていきたい。